

資料涉獵余話

その71

前回述べた通り、大正後期に会誌「鳥路」を発行していた篆刻研究会「峡風印社」は、単なる趣味の会に止まらず、後に陶芸や作陶にも活動範囲を広げていく。

大正11年2月8日付の地方新聞「南信」には、実に興味深い記事が載っている。それは、飯田産の「伊那焼」を当地の名産とするべく、一般から「伊那焼伊那節」を募集し、その優品を陶器に

社編集部が行うこと等が記されている。

3月9日付新聞では、「伊那焼伊那節」の当選発表が行われた。募集期間が短かったにもかかわらず、応募総数

「伊那焼伊那節」の当選発表が行われた。募集期間が短かったにもかかわらず、応募総数

大正期の篆刻研究会「峡風印社」の活動について(後)

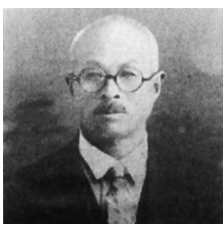
鎌倉 貞男

大正11年2月8日付の地方新聞「南信」には、実に興味深い記事が載っている。それは、飯田産の「伊那焼」を当地の名産とするべく、一般から「伊那焼伊那節」を募集し、その優品を陶器に

北澤千里 城・虚六が各二入選し

一に伊那焼二に二本松三に棹さす天龍峡三等 飯田町 木下流星

おまへ邪推よ伊那焼ほかに買ふた覚えは更にない(以下略)



後年の吉澤(宮澤)白城

さうに、大正15年10月20日付「南信」新聞の記事では、名古屋高等商業学校(五周年記念郷土産業紹介展覧会)からの出品要請を受けた飯田商工会議所が、吉澤白城の伊那焼の出品物を同展覧会に送ったことが確認できる。その伊那焼の窯は愛宕坂にあったらしい。

ついでに言うと、当選句数の最も多いのは平栗猪山で、投句中四句が選に入っている。猪山はこの時期の下伊那を代表する俳人であるが、正にその面目躍如である。次いで、白

伊那節募集

飯田で焼ける伊那焼陶器宣傳の目的で左の範囲により伊那節を募集致します

一、募集品は必ず伊那焼のみを以てし、入選品は十首とし一人応募九首以内

一、締切大正十一年三月二十日

一、贈賞者飯田村、吉澤、白城宛

一、賞品一等より五等迄は入選品を刻せる伊那焼陶器

一、発表 三月末日

右應募諸君は小冊子(號住所姓名明記ありたし)として一般へ配付の豫定

主 備 飯田常盤新道

後 援 伊那焼倶楽部 伊那焼印社 伊那焼後援部 伊那焼接部 伊那焼新報社 南信新聞社

「伊那焼伊那節」の募集案内(「南信」大正11. 2. 8付)

村の母親の生家を継ぎ、姓を宮澤と改め、その後、この伊那焼で、終戦直後の同村村長となった。役場吏員であった山田虚六(延次郎)は、後年、郷土史家・俳人となり、医師であった今牧光山(祐平)は、三宅島阿古村の村医として赴任